

二〇一五年のノーベル医学生理学賞は、イベルメクチンの開発に関わったウィリアム・C・キャンベルと大村智、それにアルテミシニンを発見した屠呦呦^{トウヨウヨウ}に授与された。イベルメクチンは河川盲目症と呼ばれる熱帯病をほとんど完全に予防でき、ことで知られており、毎年二億人以上の人に無償で投与されている。アルテミシニンはマラリアの治療薬の原型となった化学物質で、二〇一三年にはそれに由来する薬剤が延べ四億人弱の人に投与された。

年間二億人、四億人という数字が並ぶと、確かに、これらの薬剤にはノーベル賞が授与されるだけの価値があるように思える。しかし、なぜこのタイミングでの受賞となったのだろうか。イベルメクチンが開発されたのは一九八〇年代初頭のことだし、アルテミシニンが発見されたのは一九七〇年代のことである。どちらも、二〇一二年に山中伸弥が受賞したiPS細胞のように広範な応用可能性を持っているわけではない。

受賞の理由として、ノーベル財団はグローバルヘルスへの貢献を挙げている。グローバルヘルスとは、人道主義的な立場から、先進国だけではなく全世界の人びとの健康を増進しようという医療のことで、二〇〇〇年代後半以降、欧米の医学界でにわかブームとなっている。日本では、致死的な病気といえどガンや心臓病、脳梗塞が想像されるかもしれない。しかし世界に目を向ければ、とりわけ開発途上国においては、マラリア、結核、

グローバルヘルス Global Health

はま だ あきのり
浜田 明範 民博 機関研究員

ノーベル賞の
メッセージ
人間学の
キーワード

HIV/AIDSといった感染症が依然として猛威を振るっている。そうであるならば、それらの病気の治療に対する貢献も等しく表彰されなければならない。

この意味で、イベルメクチンの開発に賞が贈られたことは大きな意味をもっている。それによつて予防される河川盲目症という病気について、知っていた人はそれほど多くはないだろう。河川盲目症は、「顧みられない熱帯病」のひとつに数えられ、危険性が高いにもかかわらず無視されてきた感染症とされている。このような特徴を持つ病気の治療法の開発にノーベル賞を授与することからは、「これまで無視されてきた感染症をこれからは無視しない」という強い政治的メッセージが透けて見える。近年、グローバルヘルスに注目が集まっている背景には、ビル&メリンダ・ゲイツ夫妻の出資したゲイツ財団による積極的な支援がある。ただし、ゲイツ財団は、単に資金を援助しているだけではない。助成したプロジェクトに説明責任を強く求めている。その結果、プロジェクトの成功を証明するための証拠として、統計学的な手法に基づいて算出された指標が用いられるようになってきている。この意味で、グローバルヘルスは、治療と研究、人道主義と成果主義が融合しているという特徴をもっている。グローバルヘルスは、人びとの健康状態を改善し、また、対象となる人びとの現状を可視化するという二重の意味で、まさに地球規模で人間の生を統治する場となっているのである。